

## ■実践報告 『マイ草笛をならそう』（生活科）

三重大学教育学部附属小学校 主幹教諭 足立知哉

### 1 はじめに

この実践は、本校の2年生を対象におこなった生活科の授業における環境教育の試みである。生活科の教科特性から、仲間と遊びを楽しむ中で身近な環境に気づいていくことを大切にして取り組んだ。

生活科では、児童を自然環境の中で自由に遊ばせる。児童は自由に遊び、いろいろなものに触ったり使ったりしているうちに、おのずからいろいろなことに気づいていく。しかし、教師がその子の気づきを意味付けたり価値付けたりしていかないと、実感を伴わず知的な気づきにはならない。素敵な気づきもすぐに忘れられていく。

また、生活科では、具体的な活動や体験を通して、児童が身近な自然とかかわりながら、自分の思いや願いの実現を図っていく。そして、試行錯誤を繰り返し、問題解決的な活動を行っていく過程で、自然に関する様々な知的な気づきをし、自然についての事象や現象について分かっていくことになる。

このような低学年生活科の特質を踏まえ、自然環境にかかわる教材を開発するにあたっては、児童の直接体験を重視し、繰り返し対象とかかわることができるようにすることを大切にしなければならない。

そこで、教材は身近で日常生活に慣れ親しんでいるもの、安全で取り扱いが容易なもの、繰り返しできるもの等、身近な自然等を十分に生かしていくことが大切である。そのため、この実践では身近な学校内の樹木・草花を活用し、児童の主体的な活動を促すこととした。

### 2 授業の実際より

#### (1) 題材について

本題材は、学習指導要領の内容（6）に対応している。

**（6）身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして、遊びや遊びに使う物を工夫してつくり、その面白さや自然の不思議さに気づき、みんなで遊びを楽しむことができるようにする。**（下線は平成20年度の改訂により変更があった部分）

本題材では、校内の草木の葉を自由に採取し、草笛に適した葉を選んだり、鳴らし方のコツをつかんだりしながら、自分だけのマイ草笛を作り出す姿を期待した。

草笛は葉を口にあてて鳴らす簡単な方法\*にした。それは、口へのあて方や吹く強さ

※ 葉をそのまま唇にあてて鳴らすもので、唇にあてた葉の上部が震えることで音が出る仕組み。唇の両側及び下部からの息の漏れをなくし、上部をうまく震えさせることによって、安定して音を出すことができる。また、震える葉の面積を少しずつ変えることで、音階を作り出すこともできる。

上記の草笛を中心に扱うが、茎や鞘を使う草笛、葉に穴をあけたり巻いたり、切って形を整えたりして加工する草笛などを試してみる子どもがいることが予想されるので、いろいろな草笛遊びも楽しむこととした。

を加減することでコツをつかむ楽しさを味わったり，試行錯誤したりしやすくなると考えたからである。

題材の導入段階では，子どもにも鳴らしやすいと考えたハリエンジュの葉を使い，葉の形状・厚さといった条件をほぼそろえることで，全員にまず草笛を鳴らす成功体験をさせて活動への意欲をもたせた。このことは，同じ葉でも仲間の鳴らす音と違いがあることに気づく姿にも期待していた。

## (2) 本時の活動

本時の目標は，次の通りである。

いろいろな葉を使って草笛を鳴らして遊ぶ中で、「薄くて大きな葉っぱが鳴らしやすいよ。」「かたい葉は鳴らしにくいよ。」などと互いに気づきを伝え合い，それをもとにしてマイ草笛にはどんな葉が適しているかと根拠をもって探すようになる。

ここでは，本時の活動から，草笛に適した葉を試す中で身近な植物の多様さに気づいていく様子を授業記録や学習プリントなどからみていく。(児童名はすべて仮名)

### ①活動前に位置付けた話し合いの場面

本時では，まだいろいろな葉で試していない子どもがいたことへの配慮もあり，まず，活動への見通しをもたせるための話し合いから始めた。話し合いは，次のような分節に分けることができた。

第1分節 (T1 ~C12)	前時までを想起し，うまく鳴った葉を紹介する中で，その葉が鳴ったり鳴らなかったりしていることに気づかせ，それを○×で板書していく場面
第2分節 (T3 ~C41)	岩井の「ハリエンジュの赤ちゃん」という意見から，同じハリエンジュでも小さい葉では鳴らしにくいことについて経験に基づいて出し合う場面
第3分節 (C42~C58)	「ハリエンジュの赤ちゃん」が鳴りにくい理由を考え，どうすれば鳴らせるかを話し合う場面
第4分節 (T30~C72)	他の草木の葉で試したことについて出し合う場面

### ア. ハリエンジュの赤ちゃんの葉の小ささと鳴りにくさに注目した子どもたち (第2分節)

草笛に適した葉を選択するための根拠に気づかせるには，「葉によって鳴り方が違うのはなぜか」，「葉の形状はどうであったか」といった視点がもてるように，気づきを高めていく必要があった。そのため，葉の形状に注目できる発言があれば，そこを切り口にして話し合わせ，活動の見通しをもたせたいと考えていた。

次はその場面の記録である。

T 3	他にどんな葉が鳴るのか教えて。
C 1 3 岩井	ハリエンジュの赤ちゃん。
C 1 4 つぶやき	ああ赤ちゃん。でも鳴らなかったよ。等
C 1 5 村川	あれは口にあてはまらない。
T 4	(挙手を促しながら) このことについていろいろ知っている人がいるみたいだね。それで，岩井君は，ハリエンジュの赤ちゃんでどうだったのかな。鳴ったの，鳴らなかったの。
C 1 6 岩井	ふきはしていません。
C 1 7 岡	鳴らなかった。

C 1 8 川口	小さすぎて、鳴りに・・・(首をかしげ)・・・鳴りにくかった。
C 1 9 数名	鳴りにくいんだよね。鳴るときもある。
C 2 0 小橋	鳴りにくいだから、もしかしたら鳴るかもしれない。
C 2 1 岡	私は持っているんですけど、
T 5	ちょっと見せて(書画カメラを指し)あそこに映して。
C 2 2 岡	(書画カメラで映し、徐々にズームインさせる。)
C 2 3 つぶやき (略)	ちっさあ。ちっちゃい。すごく小さい。うわあ。等
C 3 3 岡	小さくって口にはまらなかったから、音が鳴りにくくて、鳴らなかった。
T 1 0	口になんて言ったの。
C 3 4 岡	口に、口が、あてはまらないから、小さいから鳴りにくかった。鳴りにくかったです。
T 1 1	(岡に)ちょっとやってみて。(他の子に)口にあてはまらないってどんなことか。口見て。
C 3 5 つぶやき	ちっさい。ちっちゃ。
C 3 6 岡	(やってみせる。)ちっちゃいから、音が出ない。(落としてしまう。)
C 3 7 保木	小さすぎて、なんか吹きにくかったです。(探検バックに入れてあった葉でやってみせる。)

C 13 のハリエンジュの赤ちゃんとは、ハリエンジュの若い苗について小さい葉のことである。葉の形状につながる発言だと考え、注目した。この発言に対して、試してみた子どもからの発言が続いた。C 17 は鳴らなかった、C 18, C 19 は鳴りにくいと、C 20 はハリエンジュの赤ちゃんの葉が鳴りにくい鳴るかもしれないとした。

全員が鳴らせたハリエンジュの葉なのに、小さいと鳴りにくいという事実は、子どもたちの関心を集めた。そして、次の草笛を鳴らす活動では、多くの子どもが小さいハリエンジュの葉で試していた。(後出の【表 1】A 欄を参照)

T 5 や T 11 で、葉を書画カメラで映させたり、実際にやらせてみたりした。それにより、仲間の視線が集まり、その葉がとても小さいことが印象付き、驚きや発見のつぶやきがあった。C 33, 34, 36, 37 は、小さすぎて鳴りにくいことを伝えたり、やってみせたりした。

#### イ. 空気がもれるので音が鳴りにくいと考え、どうすれば鳴るかと考えた子どもたち (第 3 分節)

C 4 2 白穂	あまりに小さすぎて、口に当てはまらないから全然ふけなくて、息だけ、息と空気だけがでてしまう。
C 4 3 東出	あの、しようと思っても、指が全然入らないので落としてしまう。指があてにくくて落としてしまう。
C 4 4 岩井	先生、落とさない方法もある。
C 4 5 岡	ハリエンジュの赤ちゃんは小さくて、指が入っても、空気が葉っぱに入らなくて、横から出ちゃうから、あの、入りにくいから出ないと思う。
T 2 5	こんなこと言っていた人、ほかにもいましたね。
C 4 6 村川	葉っぱを横にして吹こうとしても、横がまだ空いているから、プツてしようとしても鳴らせないと思います。
C 4 7 岩井	落とさない方法もあります。落とさない方法は小指で、(身振りで) こういうふうにやればいいと思います。
C 4 8 小橋	小指だけだったら、力が入らないと思う。
C 4 9 佐藤	小指 1 本だったら力が出なくて・・・小指 2 本だったら力が出て落とさなくて吹けるんじゃないですか。
C 5 0 岡	ハリエンジュの赤ちゃんは小指でも、多分、小指もちょっと強いから穴があくと思う。

実際に鳴らそうとする仲間の様子を見て、子どもたちは葉の口へのあて方に着目した。

C 42 きちんと当てられずに息がもれる，C 43 うまく押しえられずに落としてしまう，C 45 葉に空気が当たらない，C 46 横に隙間ができるから鳴らせないというように理由を述べた。C 47 以降，どうすれば鳴らせるかと考え始め，C 47 は小指で押しえる方法をやって見せ，C 48 は葉に応じた力加減について，さらにC 49 は指の数を増やして強度を上げる工夫を述べた。またC 50 は，葉がやわらかいために，力が強いと穴があくのではないかと考えた。これらは，自分の選んだ葉が鳴らなかった時，すぐに諦めず，どのようにすれば鳴るか試行錯誤する余地があることを示唆する大切な意見である。また，葉の大きさや厚さ，かたさにも気づき，関連付けて考えた意見である。

この後（第4分節），ニッケイとキンモクセイというかたさが対照的な2種類の葉について実際に鳴らしてみせる場面があった。ニッケイは大きな音が鳴ったが，葉の厚さによって一部鳴らなかったとする意見もあった。キンモクセイは鳴らなかった。葉がかたい上に，表面が波打っていることも原因だと考えられた。

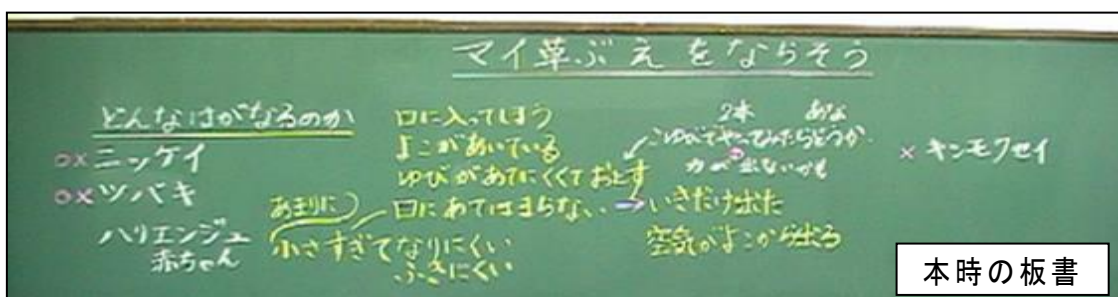
本時の時点で，まだまだいろいろな葉を使った自由試行の時間を十分にとることができておらず，気づきに差のある子どもたちであったが，話し合いが進むにつれ，一人ひとりの状態に応じて，より具体的な見通しをもつことができたと考えられる。（後出の【表1】A・B欄を参照）

#### ウ. 話し合いの中に見られる気づきの高まり

仲間の考えを聞いたり，葉の実物を書画カメラで映して見たり，葉を吹いてみる仲間の姿を見たりすることによって思考が促され，仲間とつながる中で気づきが高まっていくことが，話し合いの内容を分節に分けてみることではっきりした。

発言者には，言語だけでなく，実物を示したりやって見せたりして具体的に伝えさせることにより，仲間の視線が集中し，気づきが共有されやすくなる。指導者は，一人ひとりの発言を板書したり，曖昧な場合は言い直させたり詳しく述べさせたりし，聞く側により分かりやすくなるようにさせる。それは，発言者自身にとっても，自らの気づきをより明瞭にする働きがある。

また，指導者が一人ひとりの発言を傾聴し，間を取ったり，一つひとつ板書したりすることは，子どもたちに思考する間を与え，共感，驚き，疑問等のつぶやきを生ませることにもつながる。そして仲間の発言に対する様々なつぶやきが，発言者や話し合いの流れ自体に影響を与えている。



## ②学習プリントに記述する場面

話し合い後、一人ひとりに活動の見通しをはっきりさせるため、学習プリントにやってみてみたい葉を書かせ、活動中にその結果を書かせた。用紙は余分に用意し、他に試したことも書けるようにした。以下は、学習プリントの一部をまとめた表である。(A・Bは本時、Cは次時に書かせた。)

【表 1】

	A どんな葉でやってみてみたいか	B 結果	C 次にどんな葉でやってみてみたいか
川石	①うめのはっぱ ②ツツジ ③かえでのなかま ④トベラ ⑤ハリエンジュ ⑥ニッケイ	①がんばってならした。でもならないうめのはっぱもある。○× ②ならない。× ③ほとんどならなかった。× ④わからない。×○ ⑤ほとんどなった。○ ⑥なったニッケイもあったし、ならなかったニッケイもある。○×	1. 長細いはっぱ、丸いやわらかい 2. へんなはっぱ、形がへんなの(おもしろいから)
戸矢	ニッケイ	すごくなる。	1. 細いは。(細いはでならしたことがないから。) 2. ハリエンジュいがいのうすいは。(ハリエンジュいがいのうすいはでならしたことがないから。)
村中	①ハリエンジュ ②ニッケイ ③さるすべり ④ツバキ	①なった。ハートの形があった。 ②なって、へんなにおい。 ③ならなかった。はがへんなにおい。 ④ならなかったし、なったときがある。	1. うすいは(うすいはがなりやすいから。) 2. 太いは(太い葉は、太すぎてなりやすくない。)
本松	①ニッケイ ②ツバキ ③サクラ ④モミジ	①ぺらぺらのほうがやりやすい。 ②まるめてもなった。○	1. ほそいはっぱ。(すじがあるから。) 2. まんまるのはっぱ。(口にあてやすいから。)
岡平	①ハリエンジュ ②ツバキ ③ツツジ ④サルスベリ	①大きいのはならせる。小さい赤ちゃんはならない。 ②なりそうだけど、ならなかった。 ③なったけど、2びょうしかならなかった。 ④ならなかったけど、なりそう。	1. ハリエンジュ(よわいいきでもなったから。)
林村	①ツバキ ②キンモクセイ ③クローバー ④ねこじゃらし	①ならなかった。× ②ならなかった。× ③なった○ ④できなかった。×	1. ほそくてまるいはっぱ。 2. ぎらぎらのはっぱ 3. へんな形のはっぱ 4. うすくてじょうぶなは。
谷水	①キンモクセイ ②サルスベリ ③ハリエンジュの赤ちゃん ④ニッケイ	①ならない。ざらツルしている。いいかおり。 ②ならない。へんなにおい。木はツルツル。 ③小さくてならない。赤ちゃんだから小さい。 ④なった。小さい方がなりやすい。ツルツルしている。	1. 小さいは(ハリエンジュの赤ちゃんは小さいからならしてみたい。) 2. 大きいは。(すごく大きい葉をならしたことがないから、ならしてみたい。)
知立	①ハギ ②ニッケイ ③なぞのは	①○ハギ。とくちょう：ふくと口のまわりがちくちくする。 ②○ニッケイ。とくちょう：音がピーとなる。 ③×なぞのは。	1. 細いはっぱ。 2. へんな形のはっぱ。

井岡	①ニッケイ ②ハリエンジュの赤ちゃん ③シロツメグサ ④キンモクセイ ⑤エノコログサ ⑥サルスベリ ⑦サンシュユ ⑧ヤブガラシ ⑨ウメ ⑩ツバキ	①うすいみどり色をしている。なった。○ ②小さすぎてならなかったです。× ③小さいけどできた。○ ④ちくちくしていたい。ならせなかった。× ⑤ほそいけどなった。○ ⑥ならなかった。× ⑦ちくちくしていたいけど、なった。 ⑧「いた」と言っていたけど、なった。 ⑨なった。○ ⑩なった人もいたけど○、わたしはならなかった。×	1. うすくて丸いの（ハリエンジュがうすくてまるいから） 2. あつくてかたいの（サルスベリがあついから。） 3. 丸くてあついの（ならしやすそうだから。） 4. ぎざぎざであつくてかたいの。（ぎざぎざがならない子がいるから）
杉	①キンモクセイ ②ニッケイ	①×まるめて ②○まるめて	1. やわらかくてまわりがぎざぎざしている、毛がないは。 2. 大きくてやわらかいは。
松口	①ニッケイ ②ツバキ	①×ブカブカ ②○すごくなった。（まるめてならした）	1. 大きいはっぱ（口に入れやすい） 2. 小さいはっぱ（チャレンジする。口に入れにくいから。）
野坂	①ツバキ ②キンモクセイ	①まるめたらなるけど、ひらいたらならなかった。 ②なった。ならないことがあるかもしれない。	1. 太い木のはっぱ。（アカメガシワもってぎざぎざにしてみる。） 2. モミジ（モミジのゆびみたいなところをちぎってやる。）

#### ア. 記述内容 A (【表 1】 A 欄)

活動前に、子どもたちがやってみたいと考えたのは、ハリエンジュの赤ちゃんやニッケイ、ツバキ、キンモクセイなど話し合いの中で出された木の葉が多かった。これは、話し合いの内容が子どもたちの見通しにつながった姿である。また、シロツメグサ、ヤブガラシ、エノコログサなどの草花の葉は、前時の結果から考えられており、生活科ノートを活用して想起し、記述する子どももいた。

しかし、多くの子どもはまだいろいろな草木の葉で試してみる段階にあると判断できたので、無理には書かせなかった。

草木の名前が知りたければ指導者に聞くこと、用紙が足りない場合は渡すことを告げた。

#### イ. 記述内容 B (【表 1】 B 欄)

ここには活動の結果を記述させた。文章や○×で、鳴るか鳴らないかを表記していた。そして、「ぺらぺらの方がやりやすい」、「細いけど鳴った」や、「大きいのは鳴らせる小さいのは鳴らせない」、「鳴ったニッケイもあ

6/26	(草花)	(木)
OTレキク	○ツツジ	
○ヤブガラシ	○サクラ	
○シロツメグサ	○Xサルスベリ	
(クローバー)		
前時のノート	Xモミジ	

どんながよくなるのか 6月27日	どんながよくなるのか 6月27日
どんなでやってみようか ニッケイ	どんなでやってみようか アレチノギク <b>A</b>
ワッパ ぺらぺらのほうが やりやすい	ワッパ ○チクチクする Xサラサラする <b>B</b>
どんなでやってみようか ツバキ	どんなでやってみようか ヤブガラシ
ワッパ まるめてやがった ○	ワッパ まわりがまじぎざする ○ X
	本時の学習プリント

ったし鳴らないニッケイもあった」など葉の形状との関連や、同じ葉でも違いがあったことに気づきを見出した子どもがいた。また、仲間の鳴らし方と比べてみたり、仲間を真似て葉を丸めて鳴らしてみたりしたことを記述した子どももいた。

活動前は、自分の知っている草木の名前や本時冒頭の話し合いで出された草木の名前を羅列していた子どもたちだったが、活動後は、葉の形状や鳴らし方の違い、仲間の鳴らし方と関連付けて考え、気づきを高めていった姿だと考えられる。

#### ウ. 記述内容 C (【表 1】 C 欄)

次時の冒頭で書かせた。前時までの経験をもとにして、葉の形状に着目して葉を選ぼうという見通しをもっていたことが分かる。

継続して活動の見通しや振り返りを書かせることで、子どもたちは自分の気づきを明瞭にすることができ、それが次の活動につなげられることが分かった。また、指導者は子ども一人ひとりの気づきの変容を把握することができ、授業中の働きかけに活かすことができた。

学習プリントは教室に掲示したり、授業中に記述内容を紹介したりすることで、仲間の気づきを知り、それを取り入れたり、新たな疑問をもったりする子どもが現れることも分かった。活動の見通しをもたせたり、活動を振り返らせたりすることは、一人ひとりの気づきの高まりに不可欠な活動であることが改めて確認できた。

### ③活動後に位置付けた全体での振り返りの場面

授業の終了 8 分前に集合させ、活動を振り返らせた。発言された葉について、他の子どもにも確認した。以下は、実際にやって見せたり、仲間へ共感や疑問の言葉をかけたりしている場面である。

C 157 辻森	ツバキ。(と言いながら、巻いたツバキの葉を見せる。)
T 108	あれっ、みんな見てごらん。(葉を巻いて草笛にしているのを指して)
C 158 数人	(中田、杉、本杉たちも自分の巻いた草笛を見せる。)
T 109	やってみて。
C 159 辻森	(プップッ、プーッと上手に鳴らす。)
T 110	8 秒。すごい。やった人いるのかな、これ。
C 160	(数名が挙手して、吹き出す。)
T 111	あっ、そんな方法があるんだ。
C 161 杉	10 秒鳴ったことある。(プーッと鳴らし、敬礼のポーズ。)
C 162 T 112	あはは。(笑い)
T 113	これ、杉さんが最初やっていたんだよね。
C 163 辻森	そうそれで、杉さんに教えてもらった。
T 114	他にもあるっていう人いますか。
C 164 本山	(立って、葉を見せる)
C 165 つぶやき	それハギ、ハギ。僕もやった。等
C 166 本山	(ピーッ、ピーッ、ピッと上手に鳴らす。)
T 115	いい音だ。
C 167 つぶやき	ハギって何ですか。すぐ破れた。どこにあったの。等
T 116	正しくはヌスピトハギです。場所は、本山君に教えてもらって。ハギでやってみた人、
C 168 木坂	(ピーッと鳴らす。)
C 169 つぶやき	鳴るんだ。
C 170 村川	だけど、ハギ、すぐ破れちゃう。

ここでは草笛を鳴らして見せ合うことを中心に進んだ。それにより、その葉でも鳴らせるのだな、そうやって鳴らすのだなと仲間の気づきを具体的に捉えやすくなり、C167、169など自分だけでは気づかなかったことも交流させることができた。また、T108で鳴らし方に注目させたことや、C170 ハギはすぐ破れるという発言により、次時の活動へ見通しをもつことができた。（前出の【表1】C欄を参照）さらに、気づきを交流することにより、自分や仲間のよさや、仲間とつながる楽しさを実感することにもなったと考えられる。

### 3 おわりに

近年、耐震工事に伴う校舎の増改築や、落葉や落ちた実が近隣住宅地・商業地、道路へ散乱するなどの理由から、学校敷地周縁部での樹木の伐採や枝落としが進んでいる。子どもたちが親しんでいたプラタナスやマテバシイの大木でさえも、枝を切り落とされることにより、しばらくの間は実をつけることもなくなってしまう。落ち葉や木の実、切り落とされた枝も生活科の題材として活用できないかと考えた。

そこで、2学期には、木の実や枝を使ったものづくりをした。

まず、学校の敷地内にある3種類のドングリの実を集めた。（アラカシ、ナラガシワ、マテバシイ）次に、切り落とされた樹木の枝のうち直径約5cm～7cmのものを選び、厚さ1cmほどの輪切りにした。そこに、自分で考えた配置でドングリをのせて接着し、ペンダントを作った。

3学期になると、附属小学校のシンボルツリーとも言えるメタセコイアの実を集めて楽しんでいる子や、ツバキの葉をまるめてブーブーと鳴らして遊ぶ子どもがいた。数人の仲間がその子の周りに集まり、それについて伝え合っているほほえましい姿もみられた。

子どもたちは、遊びやものづくりを通して学校の自然環境に触れ、気づきを高めることができたと考えられる。また、今後、自然環境に興味を深めていったり、大切にしようとしたりする態度にもつながっていくと考えている。

生活科において、科学的な見方・考え方の基礎を養う観点から、現行の学習指導要領では改訂のポイントとして「自然の不思議さや面白さを実感する学習活動の充実」や、「社会科・理科とのつながりを視野に入れた指導」が挙げられた。

今後も、一年を通して、子どもたちが自然に直接接触れる中で環境について気づくことができるような活動を、生活科の題材として開発していきたいと考えている。



#### 【参考文献】

- 三重大学教育学部附属小学校(2010), 第35次研究紀要「生活科」
- 三重大学教育学部附属小学校(2014), 第36次研究紀要「生活科」



【資料】活動中の写真／2013. 6. 27



葉を書画カメラで映しながら説明する



何度も試してみる



↑仲間と確かめ合う↓



↑「みんな、ちょっと聞いてみて。」

振り返りの場で  
鳴らして  
確かめ合う →



ツバキ  
の葉を  
丸めて  
鳴らし  
てみた  
ブーッ!  
←